石櫻新聞

発行所
盛岡市長田町7の60
岩手高等学校
岩手中学校
出版委員会
責任者　吉田　稔
印刷所　山口北州印刷

社史　年史　単行本　機関紙　カタログ　パンフレット　ポスター　新聞
山口北州印刷
盛岡市青山四丁目(40)0585

昭和54年度 後期石桜会役員

田中君

太田君

高橋君

熊谷君

平子君

会長就任にあたって

田中和斗

新校舎に移り早一年が過ぎ、三年ぶりの文化祭も盛況のうちに無事終了しました。一・二年の諸君は一息つき、三年生の皆さんは来年早々の大学入試を目指して最後の追い込みに入られたことと思われます。

私は、人間の性格には二つのタイプがあると考えます。一つは学術優秀で、すばらしい判断力と実行力を持ち、何事も能率よく敏速に考え行動する人間。一方勉強も余りできる方ではなく、先の事を考えずに、ただ無我夢中に行動し、そして失敗を繰り返す人間。よく言えば七転八起の精神を持ったタイプの人間です。私はどちらかといえば前者よりは後者のタイプにあてはまり、決して優秀な人間ではありません。しかし、生徒会役員は、優秀な人がやらなければならないという規則はありません。よく生徒会の役員は優秀でなければならないと言う考えを持っている人がいます。しかし、それは間違いです。生徒会というものは特別な人間の集まりではありません。生徒会長だからといって特別な見方はせず、一人の生徒として見てほしいのです。また、その方が私も働きやすいのです。生徒会に偏見を持たず、生徒会と生徒とのつながりを、より親密なものにしていけば、今、世間でささやかれている生徒会に対しての無関心という問題も私たちの間から消え去るのではないのでしょうか。

そもそも生徒会長という仕事は、皆さんの代表、岩手高校の生徒代表という役でしかありません。本当に岩手高校を発展させていくのは皆さんなのです。私はただそれを先導するだけなのです。どんな立派な行為も、それを後方でささえてくれる大勢の協力者がいなければ成功するはずはありません。ですから私は、皆さんといっしょに岩手高校のことを考え、皆さんといっしょに岩手高校をよりよいものにしていこうと思っているのです。

さて、これからの岩手高校は、どのような方向へ進んでいくべきでしょうか。ちょっと考えただけでも、やらなければならないことがたくさん頭に浮んできます。例えば、新校舎に移転して二年目になりましたが、いまだに私達の校舎の扱い方は乱暴です。どのように校舎を扱っていけば最もよいのかということを、皆さんが考えていかなくてはなりません。少しでも学校のことを考えていくのなら、それなりの変化が現われてくるはずです。「この校舎に新しい魂を入れるのは君たちだ。」という新校舎落成時に校長先生のおっしゃられた言葉を大切にしていくべきです。

ところで、この間行なわれた文化祭についてですが、三年ぶりに行なわれた大行事ということもあって色々な問題もあったと思いますが、一からスタートしたことを考えれば、それはむしろ次の文化祭への励みとしてとらえた方がよいでしょう。色々な問題があったとしても、それを乗り越えてこそ、はじめて文化祭を開催したという実感があるのではないでしょうか。このことは何も文化祭だけのことだけとは限りません。クラブ活動・各委員の活動・日常生活などにおいても同じように大切なことです。私は皆さんが、このようなことを行なうにあたって、それを補助する役をやりたいと思っています。自分のクラスの仲間同志また、先輩と後輩とのつながりや接し方によって、学校のよりよい雰囲気や秩序ができていくのですから、私はできてのような人間関係を大事にして、自分に与えられた六カ月の期間を有効に使っていきたいと思っています。

『何かをやりとげることは感激です！』

×　×　×　×

後期生徒会役員

去る十一月十九日の石桜役員改選の結果、後期役員が次のように決定し、すでに認証式を経て新しい体制で活動を開始した。新役員は次のとおりである。

◎執行委員会
会長　田中　和斗
副会長　高橋　明広
太田　貢
書記　平子　剛志
執行委員　熊谷　幹雄
鈴木　純二
及川　晃
高屋　道雄
石井　康
鈴木　和彦
石川　元喜
中村　和彦

◎常任委員会
○生活委員会
委員長　鈴木　純二
副委員長　高橋　伸行
菊池　研作
○学習委員会
委員長　及川　晃
副委員長　田村　望
新井　巌
○図書委員会
委員長　高屋　道雄
副委員長　坂本　政之
三浦　泉
○出版委員会
委員長　石井　康
副委員長　佐藤　尚久
佐藤　敬史
○放送委員会
委員長　鈴木　和彦
副委員長　本多　好郎
吉田　達
○体育委員会
委員長　石川　元喜
副委員長　八重樫　真
梨子　洋和
○文化委員会
委員長　中村　和彦
副委員長　岩渕　秀喜
飯岡　克

新応援団幹部

十二月三日、我高の応援団幹部が、次のように決まった。

団長　佐藤　隆二（二D）
副団長　木津川　明（二E）
高橋　明広（二E）
幹事　田中　和斗（二A）
千葉　孝之（二D）
岡田　誠（二E）
照井　和久（二E）
大矢　裕之（二E）
工藤　弘毅（二B）
小泉　聡（二D）
滝川　昌洋（二D）
畠山　泰志（二D）
藤尾　公祐（二E）
佐藤　敬（二E）
吉田　敦（二E）
羽沢　昇（二E）
平子　剛志（二E）
熊谷　幹雄（二E）
高橋　浩（二E）

五十四年度前期奨学金授与さる

十一月五日、全校生徒の集まる朝礼で、前期優秀な成績を収めた次の十四名に奨学金が授与された。

一年E組　斎藤　博美
〃　細越　健志
〃　畑山　誠
〃　永井　栄一
〃　菊池　祐一
〃　熊谷　幹雄
〃　小泉　謙一
〃　高橋　修二
〃　樋沢　亨
〃　土井尻康浩
二年E組　笠原　敬
〃　小笠原和博
〃　田村　望
三年C組　高橋　智明

吹奏楽部、この一年をふりかえって

吹奏楽クラブの活躍は、不振の我が校クラブ活動の中にあって、きわだっている。殊に今年度は菊地、川村両先生の熱心な御指導のもと、全日本吹奏楽コンクール東北大会に七年ぶりの出場を果たす など、新たな伝統を築いたかに見える。

部長である坂本君にこの一年間を振り返ってもらった。

△△△△△
▽▽▽▽▽

全日本吹奏楽コンクール東北大会、我々はこの日のために練習をつみ重ねて来た。そして念願の東北大会に出場を果たした。七年ぶり二度目である。

三年生からバトンを受け継いで以来、毎日練習を続けて来た。そのかいあって次第に活動は充実したものになっていった。

一、二年だけの新メンバーで参加した第七回東北マーチングフェスティバル。それも七年連続出場を果たせただけに感激も一層深いものだった。

四月、新入生をむかえてほぼ、コンクールの編成でスタートした。各学年の間にさほど隔たりもなく、練習中には曲の演奏があおるごとに冗談をいいあって騒ぐようなこともあった。しかし、演奏会やコンクールが近づくにつれて、それもなくなった。

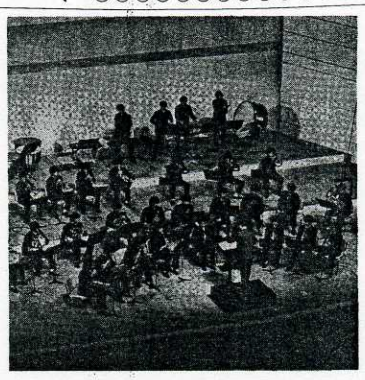
七月二十七日、県民会館大ホールでの初めての定期演奏会、日頃の練習の成果を発揮し、大成功をおさめることができた。

八月二十六日、盛岡地区予選。危なげない演奏、規定の十二分間の演奏があっという間に終った。「優秀賞」、十六年連続県大会出場を果たす。

九月九日、ついに決戦の日が来た。「最優秀賞」、ついにやった、東北大会出場だ。さきほどまで鬼のように見えていた審査員が神様のように思えた。会場を出ると夜空いっぱいに星が輝いてみえた。なんと美しいことか。

九月二十九日、十時四十五分。〝東北大会〟演奏が始まる。十二分が永遠に続くように感じられた。一年間のすべてを物語るようにして演奏が終った。手ごたえは充分あった。が、皮肉にも結果は「銅賞」だった。すべてが終わった。悔いはなかった。

この一年間部員みんなが得たものは言い尽くせないほど大きなものであった。



十月の終わりに、三年生にとっては最初で最後の文化祭が行われました。ここ数年、運動会も実施していない我が校にとっては、最大の行事だったと思われます。

短い準備期間にも拘らず当初予想されたものより充実した出来映えで、見学者も七百名を越し、先ずは成功と言えるでしょう。しかし、幾つかの問題点を挙げなければなりません。第一に文化祭実施の決定が遅すぎたことです。時間的余裕がなかったことは、展示内容にかなりの影響を及ぼしたと言わなければなりません。大切にしなければならないのは、日々の積み重ねから生まれるものと考えるのです。第二に、生徒会の役割です。役員改選のかとねあいもあったとはいえ、生徒会内での文化祭についての話し合いがほとんどなかったことは、何より残念なことと思います。「生徒自らの手で創る文化祭」、私達はそれを目指さなければなりません。第三に、文化部以外の生徒の参加の仕方です。暇を持て余しブラブラしたり、校外への外出が目立ちました。第四に、トイレに男女の区別をつけなかったことです。外部からの来客のお客さんが来ることは予想されていたにもかかわらず、それはなされませんでした。細い配慮に欠けたと言いたいのです。

主張

心に思いついたまま書きならべました。まだ、遅くはありません。生徒会、各部において活発な反省をおこないたいものです。それが来年度以降の活力ある石桜文化祭につながるものと信じるからです。

石割桜

〝KDD〟に〝カラ出張〟七九年の後半はイヤというほど社会の不正腐敗が目についた。師走に入って、人気挽回をはかる総理の訪中も、パンダ盗りと陰口をたたかれる始末である。いつからこういう世の中になったのだろう。大人は口を開けば「今の若い者は……」と言うが、私達も「今の大人は」と言い返したくもなる。空前のブームをよんだインベーダーゲームだって結構勤め人が楽しんでいたようだ。

◆さて、目を校内に転じてみると、今年は三年ぶりに文化祭が陽の目をみた。新校舎になって初めてのもので、経験者がいなかったので、生徒会はじめ各部の連中はだいぶ苦労したようであった。それでも立派な施設になったせいか来校者が多く盛大だったようだ。他校の女生徒も多くつめかけ在校生はいかにも満足だったようである。ただ、展示内容や催し物の方でお客さんにも満足してもらわなくてはいけないと思うが…。

来年、早々には校庭整備も完成すると聞いているので、私達の環境は素晴らしで喜んでもいられまい。私達自身の精神の高揚と実行力が求められている。

◆昨年の「石桜」紙上に、我が校の低迷した校風を改革していこうという気運が応援団をはじめとする二年生の間に起こったことを紹介したことがある。彼らは最上級生になったわけだが受験や就職とそれぞれの道に多忙だったせいか、今年は一向に〝改革〟の声が聞かれなかったように思う。何も三年生を責めるわけではなく、後輩が先輩の志を受け継ぎ、発展させなければいけないと思う。持続する志を持ちたいものである。

昭和五十四年度石桜祭開かる

村井伸吾

十月二十七日、二十八日の両日、我が校伝統の石桜祭が三年ぶりで復活した。本校は、一昨年の不慮の火災により、校舎、教材等一切を焼失した。以来、幾多の苦難にぶつかりながらもそれを乗り越え克服して、現在に至ったのである。これこそ、本校に永年、培われてきた「石桜精神」そのものではあるまいか。

――「石桜は、苦難にうちかつ、若々しいエネルギーの象徴である。そしてうれしいことに、苦難は苦難だけに終るのではない。それを乗り越えて、年々美しい花を咲かせるのが石桜である。」（「石桜五十年史」岩手中・高等学校）

生徒の積極的かつ、自主的な活動が、新校舎の中に繰り広げられる。二日間に見せた生徒の活気と行動力それは、普段の学習生活では、けっして測り知ることのできない、それでいて社会生活においては、必要不可欠のものである。それでは、この辺で、血気盛んな生徒の活動を、私なりの「観賞」を交じえながら、報告することにする。

まず、最初は物理部。白衣を纏った係員の中に、誰一人としてボンヤリしている者はいない。展示品を手に持ち、熱っぽい解説を加える者。むずかしい顔をして無線機を操作する者。各人が、自分の仕事に意欲的にとりくんでいる。もともと機械に弱い私は、彼等の緻密な頭脳と、その行動力に畏縮して、次なる会場へ足を運ぶ。

生物部。会場に足を踏み入れた途端、

「先生、説明しましょうか。」

普段の授業では、いつも大しい（？）はずの生徒が早速、私に声をかけた。

「この魚は……。」

係員のいかにも教師然とした態度。いかにも解ったような顔をして、首肯く私。この光景はさながら、師弟逆相の構図である。ようやく解放されて、次は書道部。会場に漂う墨の香りは、日本の伝統的な情緒を醸す。その中で観客は、展示された力作に魅了され心ゆくまで芸術の秋を満喫する。私は私で、生徒の活気に畏縮きみだった心を十分に畏縮して、その場を後にした。

次は、ビートルズ・フェア。ここは、講堂で行われたバンド演奏と共に、若いエネルギーをおもいきり発散し、若人独特の活気を呈する。そしてまた、女子高校生の持たらす新たな熱気は、会場を異常なまでに賑わせていた。生徒の挙動に一抹の不安を感ずるを得ない。感心したのは、ビートルズ・フェアの趣向が、極めて独創的であったことである。レコード鑑賞だけに止まらず、レコード、レコード・ジャケット、音楽雑誌の展示、さらにビデオフィルムの上映、以上の活動に、係員のビートルズに対する専心の極致を垣間見たのは、恐らく私にかぎったことではないであろう。

しんがりに応援団。ここは、あたかも女人結界のように厳然とした活気を呈していた。校旗、団旗、手旗の掲揚。係員による校歌斉唱。

旭日ににおう桜花
其芽大地の深きより
出でて貫く花崗石
郷の名所青春の
意気をかたどるうれしさよ

またしても、生徒のもたらす威圧感が、胸をしめつける。そしてそれは、本校の歴史を持つ重みとなって、いつまでも心の中を去来していた。

応援団の活動は、本校の伝統と歴史を象徴する。ここに観客は、新校舎に継承された伝統と、今に至るまでの努力と熱意を十分に感知できたのではあるまいか。その他まだ印象に残ったクラブもあるが、紙数の都合で割愛していただく。

さて、以上のごとく生徒を主体とした二日間にわたる文化祭は無事終了した。

それは、文化祭の経験がない全校生徒にとって未知なるものへの挑戦であった。そして、それを完全に克服した今、生徒の心はその自信と満足感とでいっぱいであろう。そこで最後に一つだけ苦言を呈しておく。

この文化祭を単なる自己満足だけで終らせてはいまいか。生徒会、あるいは各クラブで自分たちの仕事を総括し、反省すべきである。絶えずその長所と欠陥を明らかにしてゆくことに文化の継承と発展が生まれるのではあるまいか。

若人の学びやに、また朝が訪れる。もうすぐ新しい活動がはじまろうとしている。青春はそして母校は、心の永遠のふるさと、限りない向上への、確かな原動力にほかならない。

（「石桜・五十年史」）

生物部

書道部

戸嶋先生　文部大臣賞を受賞

十月十日、本校教務主任の戸嶋正夫先生は東京千代田区東条会館において、文部大臣体育功労賞を受賞された。

先生はこれまでにも、四十九年の文部大臣学校教育功労賞、昨年の県体育功労賞を受けられ、今回で三度目の受賞である。いずれも先生のこれまでの業績、すなわち、戦後いち早く岩手県の諸体育協会設立に尽力され、その後永年にわたって高体連理事長として県の体育教育発展に果たされた仕事に対して贈られたものである。殊に今日の〝ラグビー王国岩手〟は、先生がその基礎を築かれ、県ラグビー協会の会長を務められてきたことを抜きにしては語れないであろう。いわば先生の教育人生の成果であるといって過言ではあるまい。

先生に受賞の感想を伺うと、「人にけなされれば気分が悪い、人にほめられれば嬉しいに決まっている。その程度の嬉しさかな。」と謙遜の言葉が返ってきたが、笑みを浮かべながらの静かな語り口に、卓越した人生を過ごされてきた人の重みといったものを感じさせられた。

（O）

中村先生は　岩手教育芸術大賞受賞

本校、社会科の中村嘉明先生は、十一月一日より五日迄、岩手教育会館特設会場に開催された第八回岩手教育芸術祭美術展において、教育芸術大賞（写真部門）を受賞された。

この美術展は、絵画、彫塑、書道、写真等の部門を持つ岩手県下の小、中、高及び退職教員の応募による総合展である。写真部門は国際写真サロン作家である近藤一彦氏が審査にあたられた。

受賞作品は、初冬の岩手山焼走りを、朝焼けの逆光がうつし出す光と影の妙にとらえたもので、重厚な構図は常中の白眉と賞讃を受けたことは、日報紙に既報のとうりである。

先生は、鈴木貫爾氏（岩手県出身の東京芸術大学主任教授）の手になる鳩のブロンズ像を副賞にいただき、ことのほかご気嫌の様子であった。

尚、写真家中村先生の経歴に簡単に触れたい。

二十九年、岩手大学地理学科を卒業する。父親の影響もあって、鍾乳洞探険、写真にひかれる。

四十五年、考えるところあって新宿ステーションビルに初めての個展を開く。

五十一年、大阪京橋ダイコロギャラリーで二回目の個展を開く。

写真家、探険家として、県下のみならず多くのファンを持つことは言うまでもない。一層の御健闘をお祈りしたい。

（S）

県下高校新人戦

我が校の健闘及ばず

水泳

水泳競技新人大会は、九月八・九日盛岡市立屋内プールにて行なわれました。

四百米自由形　八位
長根　誠一
五分四十四秒四　十位

二百米背泳　石川　義勝
三分九秒五

四百米個人メドレー　十位
石川　義勝
六分三十七秒八

四百米メドレーリソー十位
長根・佐々木・石川・藤村
六分十一秒三

以上、水泳部員の奮闘もむなしく、成績はかんばしいものではなかった。しかし、大会に望む意気込みはすばらしく、来シーズンは好成績が望めそうである。

ハンドボール

ハンドボールの新人戦は、十一月十～十二日の三日間にわたり、花巻北高校を会場として行なわれた。

十日　下位リーグ第一日

岩手12（4―9　8―2）11水沢

前半は、焦りと緊張からボールが手につかず、自分たちの思い切ったプレーができず相手にリードを許してしまった。しかし、後半やっと落ち着きをとりもどし、本来のプレーをして見事な逆転勝ちをおさめた。

十一日　リーグ第二日

岩手13（6―6　7―7）13大迫

この試合前半は、常に相手チームに先攻され、我チームは追いついていくという前日同様の試合運びだった。後半に入り、我チームはペースを取りもどしたが終了寸前に同点に追いつかれると言う試合運びのまずさから惜しい試合を落とし、上位トーナメント進出の道を絶たれた。

剣道

剣道競技は、十月二十九日、三十日に黒沢尻北高等学校で行なわれた。我が校は、一回戦を順調に勝ち進んだが、二回戦で強豪宮古高校と対戦し、善戦むなしく敗退してしまった。個人戦は、各自本来の調子が出せず、すべて一回戦で負けてしまった。

団体戦
一回戦
岩手　2―1　大船工
二回戦
岩手　0―4　宮古

野球

盛工の壁厚し

第三十二回東北六県高校野球盛岡地区予選大会は、九月九日盛岡市営球場で行なわれた。抽選のいたずらであろうか、我校はまたも初戦で盛岡工業と当たってしまった。連続四回目である。今度こそ何とか一矢報いようと勇躍し、マシンで鍛えた打棒が大いにふるい一回表満塁塁から二本の三塁打で五点を先取した。しかし、その後どうしたことか失策が続き、バントヒットなどもまぜた攻撃にあい七点を取られてしまった。その後よく押えて、八回を二点差でむかえた、ついに四点を加点され、またも強豪盛岡工業の前に涙をのんだ。

岩手5 0 1 0 0 0 0 0 0 6
盛工0 7 0 0 0 0 1 4 ×12

岩手（投）本多（捕）浅沼
盛工（投）瓜田・熊谷（捕）小田

○三塁打　浅沼・鈴木（岩）
○二塁打　桜田（宮）・小田（工）

	盛工	岩手
打数	34	30
得点	12	6
安打	12	6
打点	9	6
振球	3	9
打球	4	5
三塁	3	2
四死	2	0
犠盗	0	3
失残	5	4

柔道

柔道競技は、十月二十七日、二十八日一ノ関文化体育館で行なわれた。我校は善戦した、技に本来のきれがなく、惜しくも一回戦で敗退してしまった。

団体戦　一回戦
岩手　1―4　大槌

個人戦

軽量級　一回戦敗退
中量級　一回戦敗退
軽重量級　一回戦敗退

バスケットボール

バスケットボール新人戦地区予選大会は、十月十日に盛岡北高等学校で行なわれた。三年生がぬけたせいであろうか、精神的に圧迫され、思うように試合が運べなかったようであった。

岩手71（36―35　35―36）71盛商

バレーボール

バレーボールの新人戦は、十月二十七日、二十八日に盛岡第三高等学校体育館にて行なわれた。

団体戦
岩手　0―2　盛商
岩手　2―1　盛工
岩手　不戦勝　杜陵
敗者復活戦
岩手　0―2　盛北

陸上競技

第三十回新人陸上競技大会が、十月六日～八日と三日間に渡って行なわれた。我校は、市内の地区予選を順調に通過し、数年ぶりに出場を決めた。リレーなどに熱戦を繰り広げた。しかし、記録は本来の力を出し切ることができず、又、失格などもおかしてしまって、あまりかんばしいものではなかった。

四×百米R
オーバーゾーン失格
四×四百米R
予選失格
走り高跳
一m六十五cm
三段跳
十二m二十七cm

庭球

庭球の新人戦岩手県大会は、十月六日～八日にかけて岩手県営運動公園コートで行なわれた。

団体戦　二回戦
対花巻北　2―1
吉田・岩渕組　4―2
小川・小川組　2―4
佐々木・乳井組　4―3
対宮古1―2

ラグビー

ラグビーの新人戦は、宮古水産高校で十月十七日～十九日にかけて行なわれた。

第一戦　対一関工業戦
岩手0（0―28　0―3）31一関工
敗者戦　対水沢工業戦
岩手16（8―4　8―0）4水沢工
吉田・岩渕組　2―4
佐々木・小川組　4―2
八重樫・乳井組　3―4

卓球

卓球の新人戦は、十月二十五日～二十七日にかけて水沢市民体育文化会館で行なわれた。

団体戦（一回戦不戦勝）
二回戦　岩手4―1花北商
三回戦　岩手4―1藤沢
四回戦　岩手1―4東和

シングルス
二回戦
小笠原0―2大船渡
作山0―2大船渡
四回戦　苅間沢1―2専北
松村1―2盛商

ダブルス
三回戦
小笠原・山崎0―2専北
苅間沢・松村0―2東和

編集後記

「師走」お経をあげるため師僧が走り回ったところからこの名がついたといいます。私達、編集委員にとっても十二月上旬は、まさしくあわただしい「師走」であったようです。石桜新聞第八十六号をお届けします。

さて紙面ですが、一面は後期石桜会役員の改選、吹奏楽部の活躍、二面は村井先生のご協力をいただき文化祭の感想、各クラブの新人戦の結果、戸嶋・中村両先生の受賞記事等を載せてみました。

「少年易老学難成、一寸光陰不可軽」とかいったことばが、いまさらながら思い起こされます。来年、新たに社会人として、あるいは大学生として、様々な道に進まれる先輩方のご活躍を祈りつつペンを置きます。

（S）